

平成 27 年 9 月 15 日

南 の 風 1 4 8

南部ミニバスケットボール連盟

会 長 藤原 敬一

②のニュートラルボールへの対処の続きです。今回の全中のゲームで 2～3 回観たのですが、床に転がったルーズボールを、頭からダイブして取りに行くやり方です。スキルとして取り上げて練習しているチームもあります。神奈川県でもあります。

一見すると、ファイトがあって素晴らしいプレイに見えます。また、ボールへの到達時間も速くなるかもしれません。理に合っているか、と言えはいえないこともありません。

しかし、頭からというのが気になります。怪我の問題です。頭から行くというのはやはりリスクがあります。野球のヘッドスライディングのリスクと重なります。私は特に、ミニバスや中学生の段階では、薦めたくありません。

③のリバウンドからのトランジションについてです。

速攻については、考え方、取り組み方がいろいろあります。共通しているのは、少しでも速くボールをリングに進めることです。

例えば、タッチダウンパスがあります。一気にリング近辺にボールが行けば、素早く得点することができます。リバウンドを取った瞬間に狙うべきプレイです。ただ成功率となると？というところもあります。特に、ミニバスや中学生では、遠投力とパスの正確性ということからです。

3チーム（二島、藤浪、所沢山口）に共通していたのは、アウトレットパスの素早さです。アウトレットパスはできるだけ高い地点（コフィンコーナーあたり）に出すことがベストです。後の展開が有利になるからです。また、リバウンドを取ってアウトレットすることで、アングルを変えることができるので、ロングパスも受けやすくなります。

藤浪中は、高い位置にアウトレットパスが出た場合は側線につなげることが多かったです。前につなぐということを徹底していました。二島中、所沢山口中はアウトレットパスをサイドに出すことをメインに考えていたようです。そして、逆サイドからインフロントカットしてくるプレイヤーにパスして、数的優位を創っていました。

いずれにしても共通していたのは、5人の状況判断（自分の役割の把握と空間支配）と素早いパス捌きです。そしてドリブルを制限して数的優位を創り出すことに集中していたことです。

ここで、数的優位の攻め方について書きます。ミニバスや中学生の練習でよく3線速攻、もしくは5線の速攻を見ることがあります。その際、なぜ3線で練習するのか、なぜ5線なのかのねらいを選手が理解していないのでは、と感ずることがあります。2対1の攻め方や3対2（速攻の場合、この場面が多い）から2対1をどう創るのかといったことを、指導者は選手に十分理解させて練習に取り組む必要があると思います。

3線速攻で話を進めます。経験が少ないミニバスや中学生の選手は、ミドルマンがドリブルにたよることが多くなります。なぜなら、チームの構成上、決まった選手にボールのキープや状況判断を委ねなければならないことがあるからです。次回は続きと、3線、5線の速攻のフィニッシュについてです。